

平成29年3月19日

## 『平成29年度 指導部の目標と9人制の重点指導項目』

JVA国内事業本部 審判規則委員会 指導部

### 1 目 標

- (1) 審判員は、公平な立場で試合を運営し、ルールを正確に適用して、バレーボールの魅力十分に引き出せるようなゲームマネジメントを行う。
- (2) 審判員は、メンタル面の強化を図り試合全体をコントロールできるように他の役員と協力してスムーズな試合運営を行う。
- (3) 審判員は、選手・チームスタッフから信頼されるように審判技術の向上を目指し、日々の審判技術の研鑽に努める。

### 2 重点指導項目

#### 【主 審】

##### I 権限と責務

- (1) 権限について（第29条第1項）

主審は、試合の準備段階から終了まで、一時中断された時間も含めて、その試合の運営における最高の責任者であり、競技規則に明示されていないすべての事項について決定する権限を有する。

主審は、その試合中、他の審判役員の判定を含むすべてのことについて、最終的な判断を下す権限を有する。

- (2) チームメンバーによる不法な行為（相手に向かって“ガッツポーズ”などで挑発・威嚇する行為など）に対して、第27条「不法な行為」に則って罰則を適用する。  
また、審判団（副審・線審等）に、チームから判定に対するクレームがあった場合は、その内容を確認し、適切に対応する。

##### II 判定について

- (1) ネット際の判定

- ① オーバーネットの判定

ブロッカーとボールの接点を確実に見て判定をする。オーバーネットの反則が起きる接点に視点（ボール1個分を目安にアタック側に視点を置く）を置き、反則が起きた瞬間に吹笛する。（吹笛タイミングが重要である）特にタッチプレーの際にオーバーネットの反則がおきている場合があるので、十分に注意する。複数のブロッカーの場合には、どの部分にボールが接触したかを確実に捉えて判定する。

- ② ブロック行為なのか、そうでないのかを判定をする。(ブロック後優位なプレーにならないようにする) ブロック行為でない場合、同一選手が続けてプレーすることはドリブルの反則になる。他の選手がプレーした場合もハンドリングにバラツキがあるとドリブルの反則になる。
  - ③ ブロック後の接触回数を正確に判定する。(1人が連続して3回プレーする等)
- (2) ハンドリング基準
- 2回目・3回目のハンドリング基準を確立させる。ボールと身体が接触する瞬間を良く見て判定する。ラストボールをパスで相手コートに返球する際も確実に判定する。
- (3) ネット付近の判定
- トスがネット付近に上がった時、アタック側、ブロック側のどちらが先に触れたのかを確実に判定すること。その接触がオーバーネットになっていないか、また、ネット上で両チームとも接触があった場合、同時なのか時間差があるのか、時間差がある場合は、後に触れた方のチームにオーバータイムスの反則がないのか等の判定が的確に捉えるようにする。
- (4) ラリー中の判定
- 副審とのコンビネーションが重要であり、ラリー中のワンタッチの確認及び主審から見えにくいプレーについては、思い込みで判定するのではなく、副審との協働で判定する。
- (5) サービス許可の吹笛タイミング
- ラリー終了から次のサービス許可の吹笛までの間が一定になるようにコントロールする。サーバーがすぐにサービスゾーンに行かない。または、デッドになったボールをすぐに取りに行かない等を確認し、遅れている場合は吹笛で促す。
- (6) 最終判定の出し方について
- ボールコンタクトの有無、ライン判定等について、主審自身が判定に確信が持てない時に限り、判定を出す前に、副審、ラインジャッジを呼んで確認する。判定を出した後、チームからのアピールで副審、ラインジャッジを呼び、その結果判定を覆すことは審判への信頼を失うことになる。

## 【副 審】

### I 権限と責務

第30条第1項「権限」、第2項「責務」を十分理解し、試合の状況を把握して主審を補佐することを意識しながら、自身の責務を遂行する。

- (1) プロトコール中、コートของทีม構成員を構成メンバー表で確認をする。  
選手の人数が15名に増えており、サービスオーダー表及び記録用紙には交替選手を記載する欄が無い為、プロトコール中の確認が重要になる。
- (2) ベンチ（ウォームアップエリアを含む）にいるチームメンバーの不法な行為に対してコントロールし、主審に報告する。

- (3) 記録員の任務をコントロールする。
- (4) サービス順が間違っている場合の手続き、不当な要求、遅延や不法な行為の記録などが確実に行われているかを確認する。
- (5) 第2セット、第3セット開始時に、監督がメンバーの変更等申告のない場合は、監督に速やかに確認を行う。確認の際は、記録用紙ではなくサービスオーダー票で確認する。その際、セット間の選手交代として正しい交代であるかを記録員と協働で確認する。
- (6) 次セットのサービスチームを記録員と協働で正確に確認する。その際は、前のセットの最終サーバーがどちらであったかを記録用紙で必ず確認する。

## II 判定について

- (1) ネット際の判定
  - ① タッチネットの反則は、第20条第3項「タッチネット」を理解し、正確に判定をする。特にアタック後にネットの網目の部分に触れる反則が判定できるようにする。
  - ② 主審にワンタッチのハンドシグナルを送るタイミングは、1本目のレシーブ後である。ハンドシグナルを送るときは、主審と目を合わせる。
- (2) アンテナ付近の判定
  - ボールがアンテナに触れたのか、選手がアンテナに触れたのか、どちらのチームが反則になったのか正確に判定ができるようにする。
- (3) 許容空間外側のボール通過の判定
  - アンテナ付近を通過する許容空間外側の判定では、位置取りを速くし正確に判定できるようにする。
- (4) 競技中断の手続き
  - ① 複数の選手交代の手続きを1組ずつ正確に行う。(記録員との協働)  
交代選手が準備していないときや、その交代が不法な場合は拒否をして、主審に遅延の手続きをするように合図する。
  - ② タイムアウト後、コートに入ることが遅くなるような場合、吹笛とシグナルで促し、繰り返す場合は、遅延の罰則を適用する。
- (5) ボールとの接触
  - 主審と同様にボールとプレーヤーの接触回数をカウントし、明らかにオーバータイムになった場合は、胸の前で主審に補助シグナルを送る。
- (6) サービス時の視点
  - サービス時、サーバーだけを見るのではなく、コート全体を視野に入れ隣のコートからのボール侵入に対して素早く対応できるようにする。
- (7) サービス順の誤りの手続き
  - サービス順の誤りの反則がおきた場合、速やかに処置ができるように手順を確実に把握する。

## 【記録員】

### I 権限と責務

第31条第1項「権限」、第2項「責務」を十分理解し、自身の責務を遂行する。

- (1) プロトコール中、コートของทีม構成員を記録用紙で確認をする。  
選手の人数が15名に増えており、サービスオーダー表及び記録用紙には交替選手を記載する欄が無い為、プロトコール中の確認が重要になる。
- (2) サービス順および得点の確認を正確に行い、記録をつける。
- (3) 次セットのサービスチームを副審と協働で正確に確認する。
- (4) タイムアウト及び選手交代を記録し、その回数を副審に報告する。
- (5) 複数の選手交代の手続きを1組ずつ正確に行う（副審との協働）  
記録員は、交代が正規であるならば、必ず副審と目を合わせて片方の手を挙げる。  
選手交代の記録を完了した後、副審に両方の手を挙げて、記録が完了したことを報告する。複数の選手交代の場合は、上記の手続きを繰り返す。
- (6) 記載ミスをした場合は、二重線で消す。主審・副審が確認したときに誤りがあったときは、記録員が修正する。
- (7) サービス順の誤りの反則がおきた場合、速やかに処置ができるように手順を確実に把握する。  
※サービス順の誤りの事象を記録用紙上で確実に捉え、副審に報告する。  
例) ○番がサービスを打つところ、○番がサービスを打ちました。次のサーバーは○番です。

## 【線審】

- (1) 担当するラインの判定を確実に行う。ワンタッチは、確実に見えた場合に限りフラッグシグナルを示す。
- (2) アンテナに関わる判定方法を確認し試合に臨む。
- (3) 選手がアンテナに触れた場合、フラッグを振り選手を指す。